

主の手にある輝かしい冠、エルサレム

【聖書箇所】 62章1～4節



ベレーシート

●今回は、イザヤ書 62 章のメッセージを受け取りたいと思います。特に、62 章 1 節を中心として、神のみこころの中心にある「エルサレム」に対するご計画について学びます。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 62 章 1～4 節

- 1 シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために、黙りこまない。
その義が朝日のように光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。
- 2 そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。
あなたは、【主】の口が名づける新しい名で呼ばれよう。
- 3 あなたは【主】の手にある輝かしい冠となり、あなたの神の手のひらにある王のかぶり物となる。
- 4 あなたはもう、「見捨てられている」と言われず、あなたの国はもう、「荒れ果てている」とは言われない。
かえって、あなたは「わたしの喜びは、彼女にある」と呼ばれ、あなたの国は夫のある国と呼ばれよう。
【主】の喜びがあなたにあり、あなたの国が夫を得るからである。

●イザヤ書 62 章 1～4 節は、エルサレムに対する主の愛と喜びがほとぼしるように、多くの同義的並行法によって表現されています。

- ①「シオンのために、わたしは黙っていない」＝「エルサレムのために、黙りこまない」
- ②「その義が朝日のように光を放つ(までは)」＝「その救いが、たいまつのように燃える(までは)」
- ③「国々はあなたの義を見(る)」＝「すべての王があなたの栄光を見る」
- ④「主の手にある輝かしい冠となる」＝「神の手のひらにある王のかぶり物となる」
- ⑤「あなたはもう、『見捨てられている』と言われない」＝「あなたの国はもう、『荒れ果てている』とは言われない」

・・・この箇所にある「わたし」とは、神ご自身が、あるいは預言者が神を代弁して語っています。そして「あなた」とは「エルサレム」(シオン)です。神のマスタープランにおいて、エルサレムは極めて重要な位置を占めています。まずは、その名称それ自体に隠されている秘密を探ってみたいと思います。

1. 「エルサレム」という名称に隠された秘密

●詩篇 132 篇 13 節に、「主はシオンを選び、それをご自分の住かとして望まれた。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。』・・・」とあるように、エルサレムは、神がこの地上においてご自身の名を置かれるために、唯一選ばれた永遠の都です。「エルサレム」は神の主権によっ

て建てられる都であり、そのために用いられる人々の存在があったとしても、決して人間の力によって建てることのできない都なのです。それゆえ、「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。」(詩篇 127:1)と語られているほどです。



—オリーブ山から見たエルサレム—

(1) 「エルサレム」の名称の一つの解釈

●ところで、「エルサレム」という言葉は、ヘブル語で「イェルーシャーライム」と言いますが、この言葉は二つのことばから成っています。一つは「イエル」(יְרֵאָה), もう一つは「シャーレーム」(שָׁלוֹם)です。「イエル」(יְרֵאָה)は「ヨッド」(יָ)と「レーシュ」(רֶ)の組み合わせですが、「ヨッド」は神の力ある御手を表わし、「レーシュ」は「頭、思考、考え、ご計画」を表わします。つまり、この二つが「神のご計画(考え)」を意味し、この語彙がもう一つの文字を伴うことで、いろいろな意味を持つようになります。



●たとえば、「神のご計画(考え)」が、

- ①「ヤーラド」(יָרַד)で「(高い所から)降りて来る、下る、低くされる」
- ②「ヤーラー」(יָרָא)で「投げる、(矢を)射る、教える、指し示す、(隅石)を置く、土台を据える」
- ③「ヤーラシュ」(יָרַשׁ)で「所有する、占領する」

●以上のような意味合いをもった存在を「イエル」(יְרֵאָה)で表わしていると考えられます。そして後者の「シャーライム」は「平和」を意味する「シャーローム」の複数形です。複数形は二倍の平和を表わし、「エルサレム」は町(都)の中でも長子的地位を有しているとも言えます。ヘブル語の「シャーローム」はあらゆる領域における神の祝福の総称です。つまり、平和、和解、繁栄、健康、知恵、心の安らぎ、勝利といった神の祝福を意味しています。従って「エルサレム」とは、神のご計画をもった方が高い所から降りて来て、神のあらゆる祝福(シャーローム)を据える場所として、神が占領する(支配する)ところという意味になります。このことがこの地上に実現するのは「千年王国」(メシア的王国)においてであり、そのときまでは、真の平和はこの世に訪れることは

ないと言えるのです。

(2) 「エルサレム」の名称のもう一つ別の解釈

●ところが、最近読んだ本の中にこうした説明とは少々異なる解釈があることを知りました。それはユダヤ人にもクリスチャンにも多くの影響を与えたユダヤ人のラビの一人、アブラハム・ヨシュア・ヘシエル(1907~1972)という方の見解です(「イスラエルー永遠のこだま」、1996年、ミルトス社)。

この本のあとがきにA・J・ヘシエル氏についての説明があります。それによれば、彼はワルシャワ生まれ。ナチスの迫害を逃れて米国に渡り、生涯ずっと米国で活躍した20世紀最大のユダヤ哲学者で、ユダヤ教神学学者の一人に数えられ、ハシティズム(ユダヤ教敬虔派)の伝統的なユダヤ教の家庭で、幼児よりユダヤ教の徹底的な学習を始め、十歳の頃には旧約聖書を全巻すべて覚え、さらにタルムードやカバラ(神秘主義)をマスターしたと紹介されています。

●ヘシエル氏の見解は以下の通りです。(上記著書42~43頁)

「町の名エルシャライムには、どんな意味があるのだろうか。この町は初めシャローム(サレム)＝平和(創世記14:18)と呼ばれていたが、後にアブラハムがエレと名づけた。「これにより、人々は今日もお『山の上にヴィジョンあり』と言う」(創世記22:14)。エルシャライムは、この両方の名をつなげたものだ。エルとシャローム、「ヴィジョン」と「平和」・・・」

●ここで私が驚いたのは、創世記22章14節の訳を「**山の上にヴィジョンあり**」としていたことです。「エル」(イエル)を「ヴィジョン」と解釈していることです。なぜそのように解釈ができるのか。ここからは私の推論です。つまり、「イエル」の語源を、「見る」という意味の動詞「ラーアー」(הָרָא)としているということです。

イルエー アドナイ

原文 הָרָא יְהוָה

見る(未完了) 主は

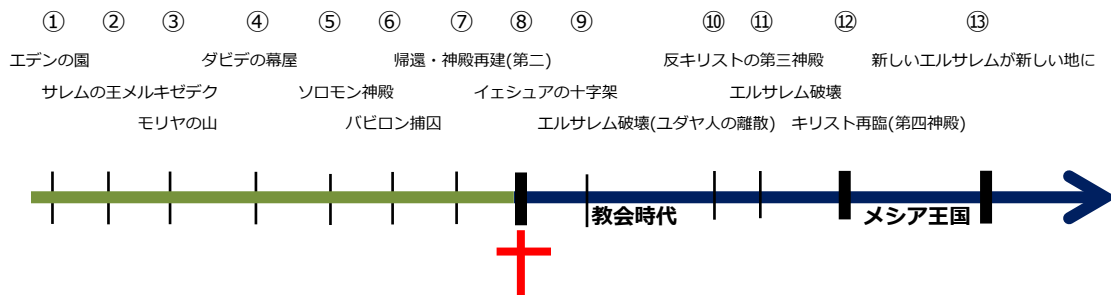
●創世記22章はアブラハムの最大の試練が記されている有名な箇所です。神から「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。・・・そこで、いけにえとしてイサクをわたしにささげよ」と命じられて、アブラハムは神がお告げになった場所、すなわち「モリヤの地」に出かけました。4節に「三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに**見えた**(「ラーアー」הָרָא)」とあります。「モリヤの地」とは「エルサレム」のことです。アブラハムと一緒に出掛けた息子のイサクは父に尋ねます。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」その問いに対して父アブラハムは「神ご自身が全焼のいけにえの羊を**備えて**(原文は「見つけて」הָרָא)くださるのだ」と答えます(8節)。モリヤの山に着いて、アブラハムが息子のイサクをほふろうとしたとき、主の使いが天から彼を呼び、「手を下してはならない。」と止め、アブラハムが神を恐れていることを確認しました。アブラハムが目を上げて「**見る**」(「ラーアー」הָרָא)と、そこには角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいたのです。そこでアブラハムは、その場所を「アドナイ・イルエ」と名付けました。そこで人々は今日でも「主の山の上には備えがある」(14節)

と言っているとあります。直訳的には「主の山において見られる」(未完了受動態)となります。つまり、「主の山は(主によって)見られている」という意味で、「**ヴィジョンがある**」と言えるのです。これが「エルサレム」の「エル」(イエル)の意味です。そしてそれに、「エルサレム」の後半の部分である「サレム」が結び合わされています。前にも記したように、「サレム」は神の祝福の総称を意味する「シャーローム」(שָׁלוֹם)(その複数形は「シャーライム」)です。「主の山には備えがある」として理解していた私にとっては、この解釈はまさに「目からうろこ」で、自分の「理解の型紙」が破られるものでした。

●「エルサレム」という町(都)の名称に秘められているものは、「**神のご計画のヴィジョンとそこにある神のすべての祝福**」です。ヘシエル氏の見解は、エルサレム(イエルーシャーライム)が神の聖なる歴史の満ち溢れた中心的な場であり、神の永遠のマスタープランにおける重要な鍵語であることを示唆しています。

2. 「エルサレム」に対する漸次的啓示

●「エルサレム」は神の歴史の中で漸次的に啓示されています。



- ① 「エデンの園」には、園を歩き回られる神と人とがいました(創世記 3:8)。
- ② 「シャレム」(=サレム)の王メルキゼデクが突然に現われ、アブラハムを祝福しました(創世記 14:18~20)。
- ③ 「モリヤの山」(=エルサレム)でアブラハムは信仰の試練を受けます。主はイサクの代わりになる一頭の雄羊を備えられました。アブラハムはその場所を「アドナイ・イルエ」と名づけました。
- ④ ダビデはエルサレムを全イスラエルの都とし、そこに契約の箱を安置しました。これがダビデの幕屋です。
- ⑤ ソロモンはエルサレムに神の宮(神殿)を建てました。
- ⑥ バビロンによってエルサレムは破壊され、ユダの民はバビロンの捕囚となりました。
- ⑦ ペルシャの王クロスによって帰還が許された民は、エルサレムに神殿(第二神殿)を再建しました。
- ⑧ 神の御子イエシュアはエルサレムで苦しみを受け、十字架によって殺され、三日目に復活し、昇天しました。
- ⑨ エルサレムはローマ軍によって破壊され、ユダヤ人は世界中に離散しました。
- ⑩ 教会が携拳された後に、神の民であるユダヤ人は反キリストによる支配と大患難を通過します。反キリストはエルサレムの神殿(第三神殿)において自分が神であることを宣言します。
- ⑪ ハルマゲドンの戦いの後、エルサレムは破壊されます。
- ⑫ イスラエルの「残りの者」たちが避難先のボツラで民族的回心した後、キリストはエルサレムの東のオリブ山に地上再臨します。反キリストと偽預言者は燃える火の中に投げ入れられ、サタンも底知れぬ所に幽閉

されます。そしてメシア王国が千年の間地上に実現します。千年の終わりにサタンの幽閉が解かれた後に最後の審判が行われ、主にある者たちはそのまま新しい天に準備されていた「新しいエルサレム」へ移されます。いのちの書に名の記されていない者たちはサタンと同様に燃える火の池(ゲヘナ)に投げ込まれます。その前に古い地と天はあとかたもなくなります。

- ⑬ 「新しい天」にあった「新しいエルサレム」が、「新しい地」へと降りてきます。「新しいエルサレム」とは神と人とが共に住む神の幕屋であり、永遠に続く御国です。

● 以上のように、神のヴィジョンは常にエルサレムをめぐって展開しているのです。永遠の都エルサレムのヴィジョンは、実はエデンの園においてすでにあつたのです。エデンの園から永遠の都エルサレムに至るまでの歴史を通して、そのヴィジョンはこれからも徐々に啓示されていきます。

3. 「新しいエルサレム」のヴィジョン

● 注目すべきことに、「新しいエルサレム」、「聖なる都エルサレム」は立方体で、その規模は一辺の長さ、幅、高さがそれぞれ 1 万 2 千スタディオンです。これは日本の全域を包み込んでしまうほどの規模ですが、それはエルサレムをほぼ中心とする神が約束された地域と重なります。

(1) アブラハムに対する主の約束

【新改訳改訂第3版】創世記 15 章 17～18 節

17 さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたもの
の間を通り過ぎた。

18 その日、【主】はアブラムと契約を結んで仰せられた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、
あの大川、ユーフラテス川まで。

(2) アブラハムが旅した範囲

● アブラハムは神に召し出されてウルという地からエジプトにまで旅をしています。そこから戻って、やがてモリヤの山(エルサレム)で信仰の試練を与えられます。そこでは神の御子の身代わりの十字架が啓示されていました。ヘブル書によれば、アブラハムは「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた」とありますが(ヘブル 11:10)、それは黙示録 21 章によれば、神によって設計され、建設される「新しいエルサレム」のことです。アブラハムは信仰によってそれを見たのです。信仰の父と言われるアブラハムのなんとスケールの大きい信仰でしょうか。



(3) ソロモンが支配した地域

【新改訳改訂第3版】Ⅱ歴代誌9章26節

彼は大河からペリシテ人の地、さらには、エジプトの国境に至るすべての王を支配していた。

- ソロモンが神殿を建てた後に、主は彼の王国の国境をエジプトから大河ユーフラテスまで拡張されました。

(4) イザヤの預言

【新改訳改訂第3版】イザヤ書19章23～25節

23 その日、エジプトからアッシリアへの大路ができ、アッシリア人はエジプトに、エジプト人はアッシリアに行き、エジプト人はアッシリア人とともに主に仕える。

24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリアと並んで、第三のものとなり、大地の真ん中で祝福を受ける。

25 万軍の【主】は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手をつくったアッシリア、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

●イザヤ書19章のこの預言は、中東の扉を開いてエジプトとイスラエルとアッシリアを結ぶ大路を造るという神の終末のご計画です。神は中東のアラブ人とユダヤ人を和解させ、地上の祝福とされるということです。なぜなら、アラブの祖先であるイシュマエルを産んだ母ハガルを主は見守っておられるからです(創世記16:10～13)。神の思いは私たちの思いと異なり、神の道は私たちの道と異なるのです(イザヤ54:8)。ハガルは、自分に語りかけた主の名を「あなたはエル・ロイ(私を見守られる神)」と呼びました。

●ユダヤ人とアラブ人(イスラム)の共通の祖先はアブラハムです。そのアブラハムの本当の息子はだれかをめぐって、「トーラー」ではイサクが真の息子であるとし、「コーラン」ではイシュマエルだとしています。そもそも民族的アイデンティティを異にしているわけです。それゆえに常に「敵対」があるのです。特にこの「敵対」は、イスラエル建国(1948年)以降、より顕著になっています。それを人間的な工作によって両者の和平を作り出すことは、「トーラー」と「コーラン」を混ぜ合わせて一つにするようなもので、不可能です。神こそ見張り人であり、神はメシアなるイエシュアによってのみ、ご自身の御計画を実現しようとしておられるのです。

ベアハリート

●「エルサレム」という語彙は、旧約の中で927回、新約では140回使われています。合わせると、何と1067回です。「エルサレム」の雅名である「シオン」は、旧約で161回、新約では7回。合わせると、168回です。「エルサレム」(シオン)は神のヴィジョンの中心です。メシア王国、永遠の新しい地における中心的な場所であり、主にある私たちがやがて行くところでもあります。

●詩篇の中に「エルサレムの平和のために祈れ。」(122:6)とあります。このことばが意味していることを正しく理解することは決して容易ではありません。しかし、絶えずそのことを主に尋ね求めながら、そこに隠されている神の秘密と祝福を悟り、沈黙したり、黙っていたりすることなく、むしろそのことを語って行く神の「見張り人」の一人になりたいと思います。